第15回 世界スカウトムート 派遣
報告書

15th World Scout Moot 2017
change
Inspired by Iceland

平成29年 7月24日 ～ 8月4日

ボーイスカウト日本連盟
第15回 世界スカウトムート 派遣員一同

目次

１	ムート概要	２
２	メンバー紹介	５
３	全体スケジュール	７
４	アイスランド概要	８
５	プログラム	
	前半プログラム	９
	後半プログラム	２１
６	インターナショナルデイ	２３
７	ショップ	２４
８	その他	２５
９	派遣員感想	２６
１０	モンベルジャケット紹介	４４
１１	次回ムートにむけて	４４

ムート概要

世界スカウトムート(*World Scout Moot*)とは、4年に1度、世界スカウト機構(WOSM)によって、日本連盟におけるローバースカウト年代(18歳以上～25歳以下)を対象として開催される世界規模のスカウト行事である。

平成29年7月25日～8月2日の間にアイスランドで開かれた第15回目の今回は89の国と地域から5,123人のスカウトが集まった。

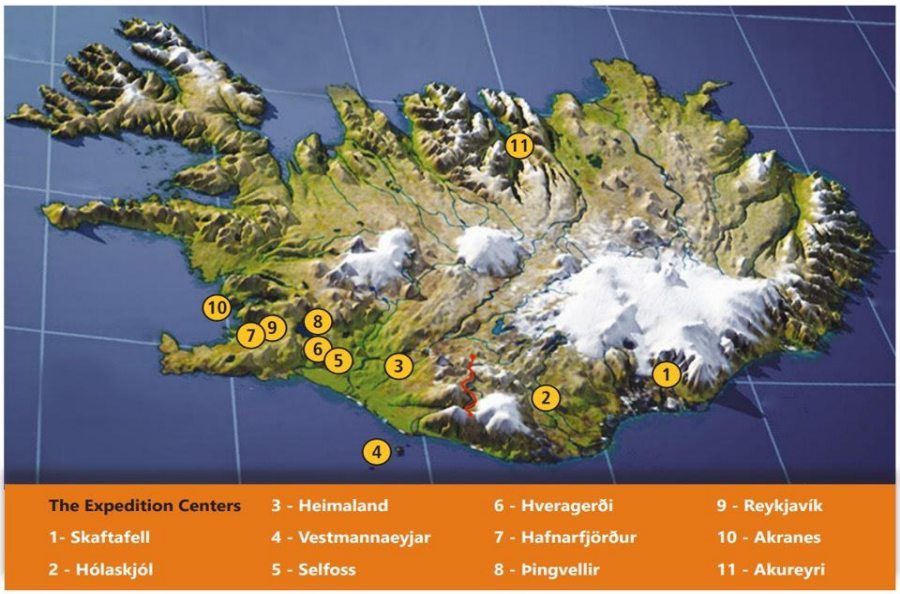
各国参加者との混成班が編成され、アイスランドの歴史や文化に触れる「文化」、北欧の自然や環境について学習する「自然」、ハイキングやクライミングを含む「冒険」の3つをテーマとしたプログラムが会場の内外で行われた。

参加者はこれらのローバースカウト年代にふさわしいプログラムを通し、日常のスカウト活動で体得した知識・技能・精神を一層高めると共に、世界各国から参加する各国ローバースカウトとの交歓により、国際協力への意識・国際理解と友情を深めた。

テーマは「*Change*」。多様な文化の中で生活することで、自然と生じる会話や変化、成長を楽しむ内容のムートとなった。

前半7月25日から28日まではアイスランド内に11ヵ所あるエクスペディションセンターと呼ばれるキャンプ地で4つのパトロールで構成されるトライブごとに生活し、場外プログラムを行った。
各国1人から2人程度で5,6カ国の人たちと10人程度の国際班が構成され、パトロールと呼び、場外プログラムへはパトロールごとに行った。

後半7月29日から8月2日までは参加者全員がアイスランドのスカウトセンターに拠点を移し、場内プログラムに参加したり、交流など自由な時間を過ごした。



◆衣:服装に関して

開会式・閉会式といったセレモニー・全体行事では制服を着用しているスカウト・ISTがほとんどであったが、制服着用を強いることはなかった。
そのため参加者は必ずIDとネッカチーフの着用し、もし着用していない場合は、ISTに着用を促されたり、会場内で買い物ができないなどの措置が取られていた。

ネッカチーフ

参加スカウト、派遣団スタッフ、大会本部スタッフなどの参加形態の区分により異なる色のチーフを着用した。

ID

IDには自分の名前、所属国、所属エクスペディションセンター名、参加形態（スカウト、IST、デイビジター、トライブリーダー等）が記されていた。また、緊急時の連絡先が記されていた。

◆食:食事に関して

配給制度によって各班に取り分けられる。調理担当や配給後の食事の摂り方に関しては各トライブで決まっており、決められた日に決められたトゥループが調理する当番制や、暇な人が用意するという特に指定のないトライブもあった。また、これら調理担当や献立などは、トライブ付き指導者の指示ではなくスカウト同士で決めていた。

配給

前半：最初の設営時に期間分の食材が配給され、夕食の献立のみ決まっており、他の食材の消費は自由だった。
後半：ムートマーケットというものがあり、各トライブに配られた配給券をもって配給品をもらうことができた。マーケットに行くとカートが与えられ、日本のスーパーの陳列棚の ように、果物や肉、パン、パスタ、調味料などの食材が並べられており、各トライブで献立を考え好きな食材を選び、帰りにレジのような配給券受取所で配給券分の食料を得ているかなど、確認し各トライブまで持ち帰ることができた。

献立

朝食・昼食は基本的にリンゴ・洋ナシ・オレンジといった果物と、ハム・サラミ・チーズ・バター・ヌテラといった具材を各々の好みではさんだサンドイッチを自分で作っていた。好きな時間に食事の時間を設けていたが、夕飯は配給制度のこともありトライブごとに献立を考え、好きに料理していた。

食堂マーキー

各トライブに一軒ずつマーキーが分配され、そこで食事の準備を行ったり、風をさえぎるためにトライブで集まるなどした。

調理器具･食器

調理器具は運営側から支給されたものを取り扱い、食器は各スカウトの個人装備であった。調理器具や食器を洗うときは潰せるポリタンクに水を汲み、ベビーバスのような桶の役割をした容器に水を少し入れ、洗剤とスポンジで洗い、汚れを落とすことが基本となっていた。

◆住:住居について

前半行程・後半行程はともにスカウト持参のテントで宿泊し、食堂フライや避難所としてマーキーが割り当てられていた。しかし後半では各トライブの指導者が同じ区画で滞在することはせず、ISTサイトに滞在し数日に一回顔を合わせる程度であった。

宿泊

前半の宿泊と同様に野営を通して生活していた。
大会側から事前にテント持参という通達は受けていたので、日本派遣隊員は自分のソロテントを持参していたが、ヨーロッパ圏内の国同士では複数人用テントを一人が持っていき、現地では同じテントで生活しているスカウトもいた。

排便施設

前半：仮説トイレがたてられていた
後半：施設トイレもしくは仮設トイレが各エクスペディションセンターに設置してあったが、設置数の増加を求める声が数多くあった。男女区別のないトイレもあり、これにより並ぶ時間を削減していた。

入浴施設

前半：近くのプールをムート参加者のみシャワーとして無料で使うことができた。
後半：会場全体で施設シャワーは男女共に５つずつ設置しており、15分程度の時間が決められ使うことができた。仮設シャワーは施設シャワーの隣に設置されており、男女の区別はなく、合板でできた壁と床と二重のカーテンがあるだけで、天上はなかった。こちらの使用時間は3分程度と短かったが、寒さのため長時間の利用は困難であった。どちらもお湯は必ず出ていた。

水場

常設トイレ等の近くに流し台がり、そこで水を汲み各トライブまでポリタンクで運んだり、洗濯や歯磨きをすることができた。水の供給が止まるところはなく、場所によってはお湯が出てくる場所もあった。

救護所

応急措置などができる救護所が設置されていた。IDに緊急時の連絡先も記されており、連絡すると場内に救急車が即刻立ち入れるようになっていた。

メンバー紹介

派遣団長
日本連盟国際委員
高橋　克広

派遣隊指導者
宮城県連盟仙台第1団
小山　猛

埼玉県連盟川口第１団
四至本　鈴香(SUZY)
Selfoss　6-3
インターナショナルデイ

埼玉県連盟久喜第１団
木村　祐介(YUSUKE)
Selfoss　3-1
記録

埼玉県連盟熊谷第２団
泉田　駿(Shun)
Selfoss　6-3
記録

埼玉県連盟草加第３団
草間　明浩
(Silent Ninja,Akihiro)
Selfoss　9-1
旅行

東京連盟中野第８団
沼上　志帆(Shiho)
Selfoss　8-3
記録

東京連盟世田谷第10団
枝迫　雄大(Alex)
Akranes　7-2
記録

東京連盟世田谷第10団
枝迫　七海(Nanami)
Selfoss　7-3
備品

愛知連盟名古屋第87団
池田　章浩(Akihiro)
Hverageroi　1-3
インターナショナルデイ

兵庫連盟神戸第43団
小林　千乃(Yukino)
Vestmannaeyjar　8-3
インターナショナルデイ/
旅行

兵庫連盟姫路第16団
神生　柚貴(YUTAKA)
Hafnafijordur　2-2
インターナショナルデイ

和歌山連盟橋本第２団
吉岡　聖(TAKSHI)
Selfoss　9-1
記念品

和歌山連盟橋本第２団
武藤　恵祐(Muto-chan)
Akranes　9-1
記録

大阪連盟堺第15団
戸谷　明寛(Toti)
Akranes　7-4
備品

大阪連盟河内長野第５団
高見　祐佳(Takamin)
Selfoss　1-1
インターナショナルデイ

大阪連盟河内長野第５団
谷　満梨奈（Marina)
Heimaland　9-3
記念品

大阪連盟豊中第１２団
坂田　成実(Narumi)
Selfoss　7-3
記録

福岡県連盟北九州第37団
中村　誠(Makoto)
Hverageroi　5-2
旅行

スケジュール

日付	時間	活動内容	場所
6月10日 6月11日	13:00～ ～15:00	事前訓練	スカウト会館
7月23日	13:00	スカウト会館集合	スカウト会館
	14:00	結団式	
		直前訓練	
7月24日	5:55	スカウト会館出発	移動
	7:00	成田空港着	
	9:50	成田空港発	
	13:50	ヘルシンキ着	
	15:35	ヘルシンキ発	
	16:00	ケプラビーク着	
		宿泊先へ移動	Ibrottahus Rettarholtsskola
7月25日		開会式会場へ移動	
	10:00 12:00	オープニングセレモニー	Laugardalsholl
		エクスペディションセンターへ移動	
7月26日		エクスペディションセンターにて班ごとのプログラム	各エクスペディションセンター
7月27日			
7月28日			
7月29日		メイン会場へ移動	シンクヴェトリル国立公園
	20:00 23:00	ウェルカムパーティー	
7月30日	10:00 11:00	宗教儀礼	
	14:00 17:00	インターナショナルカーニバル	
7月31日	9:00 12:00	プログラムビレッジ	
	14:00 17:00	プログラムビレッジ	
8月1日	9:00 12:00	プログラムビレッジ	
	14:00 17:00	プログラムビレッジ	
8月2日	9:00 12:00	プログラムビレッジ	
	14:00 15:30	クロージングセレモニー	
8月3日	2:00	会場出発	移動
	3:40	ケプラビーク空港着	
	7:30	ケプラビーク空港発	
	13:50	ヘルシンキ空港着	
	17:15	ヘルシンキ空港発	
8月4日	8:55	成田空港着	
		解団式	

アイスランド概要

◆国名
アイスランド共和国　*(Republic of Iceland)*

◆国旗
海を示す青、火山を示す赤、氷河を示す白

◆首都
レイキャビック
市内のみで約12万人、周囲の市を含めた首都圏全体で約21万人(2016年)である。
アイスランドの全人口の約2/3がこの一帯に集中しており、首都としては世界最北の北緯64度8分に位置する。

◆日本との時差
9時間　サマータイム実施していない。

◆地理
北緯約64度　西経21度　面積102,828km²（ルソン島や大韓民国とほぼ同じ）

◆人口、人口密度
337,610人（170位）（2012年）
約3人/km²　（2012年）

◆通貨
アイスランドクローナ（ISK）1クローナ＝約1.07円（2017年11月現在）

◆気候
アイスランド南部は西岸海洋性気候であり、アイスランド北部はツンドラ気候である。
気温　（レイキャビック市内）
夏＝最高…15.5度　最低… 9.5度
冬＝最高… 2.5度　最低…-2.5度

◆公用語
アイスランド語

◆国教
ルター派のキリスト教が74%程度に達する。

◆航空便
日本からの直行便はなし。今回はフィンランド経由

◆食文化
魚介類やクジラが良く食べられており、伝統的に狩猟によって海鳥を食べている。また牧畜が盛んであり、食肉も生産されていて肉料理も食卓にのぼる。

◆国土
火山国なので、国のいたるところで温泉が吹き出している。地熱は発電のための重要なエネルギー源として用いられ、その余りとして生じるお湯が、温水の供給にも使われているアイスランドでは、地下から吹き出す温泉を使った入浴施設はもちろん、各家庭にも温泉のお湯が供給され、国のあちこちで温泉を体験することができる。また、この温泉を利用して本来アイスランドの気候では寒過ぎて育たない食物を栽培したり、本来は寒くて作物を育てることができないような時期にも食物を栽培したりしているため、輸入品の食材だけではなく、地元産の野菜などが食卓にのぼることもしばしばある。

前半プログラム

各エクスペディションセンターにて混成班ごとにプログラムを行った

セルフォース　*Selfoss*

Community Service　公園舗装

セルフォースから、車で20分程の国立公園内の道を舗装した。園内の整備として草を抜きそのあと砂利を引くという作業をした。その中で、作業の指示をしている方がボーイスカウト関係者ではなく周辺に住んでいる方であった点が興味深かった。そこから現地のニーズに合わせた活動が具現化されたのではないかと感じた。

Community Service　海岸沿いの道に砂利敷き

地域奉仕の活動として、地元の人と共にエクスペディションセンター近くの海沿いの道に砂利を敷いた。山砂利からシャベルを使い、一輪の台車に積む。そして、砂利を積んだ台車を海沿いの道まで運び、砂利を敷く。最後はレーキを使用し、平らに整えた。この繰り返しで作業を進めた。

Community Service　公園のペンキ塗り

セルフォースのエクスペディションセンターから徒歩10分程度の公園でアイスランドの現地のローバースカウトの指示のもと遊具のペンキを塗った。

Community Service　個人宅の枝撤去

個人宅にお邪魔し、庭に散らばっていた伐採した枝や葉を集積場まで運んだ。また、植樹のお手伝いも行った。

Ingoslfsfjall hike

このハイクはセルフォス近くの山で実施された。アイスランドの山は日本の高山に近い山であった。ほとんどが岩と砂で出来ていた。斜面が急で風が強いため砂埃がたち、事前の脅威を感じざるを得ないハイクだった。

Skinnhufuhellier　飛込み

湖のほとりにある洞窟をハーネスを装着し崖を伝い見学した後橋の上から約5m下の澄んだ水面に飛び込むアクティビティだった。度胸試しをしつつ大自然を体を張って体験した。飛び込んだ後から水温は3度であったことが伝えられた 。

Smithy　フックを作る

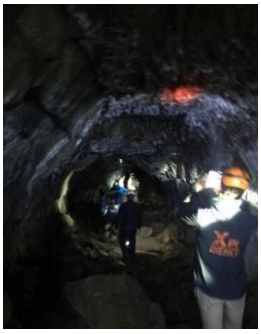
鍛冶体験を行った。渡された鉄の棒を熱しては叩き、尖らせ、延ばし、曲げ、穴をあけてフックを製作した。煤が舞い、金槌の音が響く工房内は炉の熱で非常に暑く体中から汗が噴き出した。出来上がったフックには個々の性格が映し出された。

Jewels of southern Iceland　一日観光

1日、バスで移動しアイスランド南部地方の観光をした。温室栽培センター *(Fridheimar)*では、温室トマトを試食。その後、幅の広い迫力のある滝 *(Faxi)*、スカルホルト大聖堂、障がい者と健常者が共に暮らしている施設 *(Solheimar Ecovillage)*、火山湖(Kerio)を訪れた。

Gjabakkahellir Cavern　ギャウバッカヘトリルの洞窟

*Thingvellir*国立公園にある9千年前にできた溶岩洞窟にバスを利用して向かった。途中、アイスランドモス（苔）の群生地でお昼寝タイムがあった。空気をたくさん含んだこの苔は、ふわふわで上質な寝心地だった。洞窟に入る前に歴史や出来方の説明を受けた。洞窟内は整備されておらず、自分のヘッドライトを頼りに水が滴る音に耳を澄ませながら進み、全員がランプを消すと何も見えなくなった。スカウツオウンを行い、神秘的な空気を感じることができ、日本ではなかなか経験できないような本当の暗闇は面白い経験であった。



Farms around Selfoss

会場から一時間ほど歩き、牧畜場まで歩いて行った。アイスランド産の牛や羊の特徴について学んだが、特に馬に関しては実際に触れたり馬小屋に入った。そのあと、牧畜場経営者の家に訪問することで、アイスランドの一般家庭の過ごし方なども体験した。

クヴェラゲルジ　*Hveragerði*

Community service　公園の石除去

エクスペディションセンターの近くに住む同い年ほどの青年たちと公園の掃除を行った。公園の遊具の周りは小石が敷き詰められており、アスファルトや広場にまで小石が飛び散っていたため、それらの小石を遊具の周りに戻す清掃活動だった。

Community service　公園の草抜き

エクスペディションセンターの近くの公園の草抜きを行った。また、花壇の整備や公園や道路の落ち葉拾いを行った。

Reykjafjall　レイキャフィヤットル

標高420mのレイキャフィヤットルへの往復で約3時間のハイキングであった。コースは難易度別に4つに分かれており、日本の山とは異なり、木は全く生えておらず、苔のような草が石の上にびっしりと生えていた。

アイスランドの伝統料理

伝統料理としてラムスープとスキール(アイスランドの伝統的な乳製品)を使ったケーキを作った。玉ねぎやキャベツ、人参、リーキなどたくさんの野菜と一緒に煮込んだラム肉はとても柔らかく、臭みもなく、非常においしかった。

Skalafell　スカラフェル

山に囲まれた温泉街のエクスペディションセンター、クヴェラゲルジから往復7時間かけて道無き道を突き進みスカラフェルの山頂まで歩いた。砂漠のようなところ、茶色い苔の生えたところ、緑のベリーの生えたところ、特徴的な岩場など地質学的な変化を楽しんだ。

Reykjadalur hot river　レイキャダールル　川温泉

川温泉への片道約2時間のハイキングであった。目的地へ近づくほど、モクモクと湯気が上がる地獄のような光景を目にする事ができた。様々なところから湧き出る源泉と冷たい川の流れが合わさり、程よい湯加減であった。

温泉と地震

地熱をテーマにした公園や2008年に起こった地震の展示を見て、アイスランドの地理について学んだ。公園では様々なところから温泉が湧いており、間欠泉も見る事ができた。

アクラネース *Akranes*

Community Serice　海沿いの清掃

地域奉仕活動の一環として、プログラムで使わせていただいた海の清掃を半日かけて行った。

Community Service　植樹と剪定

現地の人の車に乗り活動場所へと向かった。プログラムの説明や指導は全て現地の人から教わった。プログラム内容は大きく2つに分かれていた。最初に直径6cmほどの苗を専用の装置を用いて植えていった。広大な草原にひたすら植えていく作業ではあったが、コツをつかむと楽しくなり、すぐに用意していた苗の全てを植えることができた。休憩時には現地の食べ物や飲み物を振る舞ってもらった。最後に、道路沿いに生えている木の剪定を行った。木が成長しすぎることによって枝が道路に飛び出し事故に繋がるという理由で行った。

海水浴・カヤック

ハワイやグアムを連想させるような美しいビーチで海水浴とシーカヤックを楽しんだ。7月末といっても水温はとても低く、足を水につけるのが精一杯といった感じであった。

民俗博物館

アカラネスという地域の特性・独自の文化を中心にアイスランドの郷土にまつわる展示を数多く見ることができた。館内では英語を話せるガイドさんがつき、わかりやすく丁寧に説明してくれた。

アカラフィアール登山

キャンプサイトから2時間かけて登山口まで歩き、さらに2時間かけて山頂まで登山した。うっすらと背の低い植物が見られるのみで岩がゴロゴロした木が全くない山であったが、山頂からの眺めは格別だった。

Borgarfjordur round trip　一日観光

一日かけてBorgarfjordurの観光。小さな農業集落にて、飼われている馬、小さな教会、農業博物館、ウール手工芸品の工房を観てまわった後、Hraunfossarという滝、それと、付近の温泉地へ向かった。

Walk in Program　プールと教会、灯台へ

アイスランドではポピュラーな温泉水を使ったプール、町のシンボルである灯台、教会から選んで、半日、観光した。ほとんど自由時間であり、それぞれが好きな行動をとっていた。

Yoga in the forest park　森の中でヨガをする

キャンプ地付近の緑豊かな公園にて、地元のヨガ講師によるヨガレッスンを受けた。

Sport competition　バレーボールやディスクゴルフ等で勝った数を競う

数人で集まってチームとしてエントリーし、それぞれミニゲームを通して得点を競い合った。優勝した。

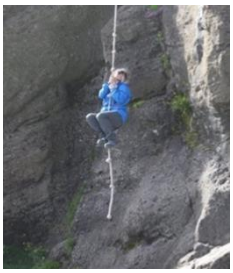
ベストマネイヤー　*Vestmannaeyjar*

Photography 風景などの写真を撮るプログラム

班でハイキングをしながら風景などの写真を撮るというものだった。世界遺産の*Surtsey*という海底火山の噴火によってできた島を見たり、海中のアシカを発見したりした。

Town Walking and Local Activities　街散策

町へ下りていき、町中の観光や、崖に打ち付けてあるロープに捕まってターザンごっこのようなことをしたりして楽しんだ。この午後のプログラムを通して班の中がより深まった気がした。



Community Service　社会奉仕

2隊、80人で町近くの崖山に登ってバケツリレー方式で肥料を頂上まで送り、最後にみんなで草花に肥料を撒いた。バケツ運搬は重労働だったが、約20か国のスカウトがともに一つのことを成し遂げたという達成感はとても大きなものだった。

HarborArea　ボート漕ぎ、水難救助体験

ボートを漕ぐプログラムだけの予定が、時間が余ったので救命スーツを着て救難ボートに乗り込む訓練をした。班全員で息を合わせ、ボートを漕いだり、人生初の救難訓練など、どれも貴重な体験でとても楽しかった。

Seven Peak Eldfell　登山

登山、元は7つの山を登るプログラムだったが、班員の体調などを考慮して1つ目の火山は全員で登ったが、その後はグループに別れ行動した。私たちはもう1つの野生のパフィンが見られる山を登り、そのあと島の歴史や動物について展示している博物館兼水族館に行った。野生で飛んでいるパフィンを見ることができとても感動した。博物館では世界遺産について詳しく知ることができたり、パフィンに身近で触れ合うことができ、とても嬉しかった。

ヘイマランド　*Heimaland*

Community Servis

大きい滝の周りは水がとても降りかかってくるので、水浸しにならないように滝の裏に砂利を運びました。階段や足場の悪い場所だったので協力しながらバケツリレーで行いました。

Seljavallalaug　温泉

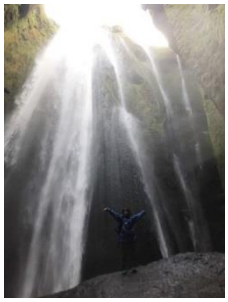
アイスランドの南部にあるセリャヴァトラロイグ。長方形のプールのような形をした天然温泉で狭い谷の中の山腹にあり、流れる川の景色を見たり、飛び込んで楽しんでいた。

Solheimajokull　氷河ハイキング、川横断

ソゥルヘイマヨークトル氷河で、ハーネス、ピッケルとアイゼンを付けてトレッキング。ガイドさんに連れられ、急な氷の坂やクレバスの横を歩いた。アイスランドだからこその貴重な体験ができた。その後はライフジャケットを着て、近くの川を横断して凍えた。

Seljalandsfoss

*Seljalandsfoss*という大きな滝を中心にポイントハイク。チェックポイントでは与えられた材料でケーキを作ったりしながら山の頂上まで登った。



ハフナフィヨルドゥル　*Hafnafijordur*

Geothermal Area

バスを使って1日アイスランドの地熱地帯を見学した。最初のストップは温泉地帯で、実際にはいれるわけではないが、温泉が今も噴出しているところなどを見た。有馬温泉のようなにおいがした。次のストップはカルデラ湖や地下活動が盛んな地帯で、自由に散策することが出来た。ここで最後と思ったが、実際はもう1つあり途中でバスを下ろされ歩いて到着したのが断崖絶壁の大西洋だった。ここで2時間以上散策した後バスで帰営した。

city tour

ハフナフィヨルドゥル市内の観光ツアーだった。ハフナフィヨルドゥルとはフィヨルドの港町という意味で、その名の通りフィヨルドが見えるこじんまりとした港町だった。市内は如何にも北欧の街といった感じの清潔で明るい感じだった。

halfday hike

*Helgafell*という岩山で標高はおそらく300mといったところだろう。地元の人も気軽に上っているようでハイキングというよりトレイルランニングの人の方が多い印象を受けた。天気は良かったが風がすさまじく、山頂は岩陰に行かないと飛ばされそうな勢いであった。

Shooting

アイスランドにある射撃場で射撃を行った。実弾ではなく火薬で発射する競技用の模擬弾の模様。飛んでくる皿を12個中何個落とせるかというものであったが2個しか当たらなかった。射撃ができる欧米圏のスカウトは割と得意だったようだ。

community service

地区の奉仕活動を行った。内容は植林で、樹木の種類はよく分からなかった。朝から雨が降っており、少し気持ちが低かったが、植林を始めると雨はやみ、帰る頃には快晴だった。80本ほど植えた。

後半プログラム

Dragon　ドラゴン

芸術とイノベーションをテーマとしたプログラム。さまざまな楽器を演奏することで民俗音楽について学んだ。また、薄い生地に模様を刻み、油で揚げて食べる、クリスマスの伝統的な料理ルイヴァブルイズ（葉っぱパン）を作った。

Yggdrasill

宗教がテーマのプログラム。ターバンやヘナタトゥーなど、外国の文化を体験することができ、自身の宗教や信仰するものについて、訪れたスカウトと話し合うコーナがあった。折り紙のブースでスカウトが作った折り鶴は、千羽鶴として日本に持ち帰り、広島県に送られた。

Bull　ブル

サイトには火山や車のアトラクションが置かれており、環境をテーマとしたプログラム。ポップコーンを作ったり、与えられた材料で30分以内で料理をした。溶岩でアクセサリーを作成するコーナーもあった。

Giant　ジャイアント

大きく身体を使うプログラムが目白押しだった。ボルダリングやエアバルーンの迷路など、参加者は楽しみながら身体の限界に挑んでいた。
また、身体だけではなく頭を使うプログラムも多く展開されていた。
*Chess*などのボードゲームや数百ピースにもなるパズルなど、身体だけではなく頭の研鑽もできるプログラムであった。

Eagle　イーグル

バイキングの本格的なコスプレや刺繍、段ボールを使った編み物など、現地の文化を色濃く表したプログラムが多く展開されていた。
また、その他にわざわざチーフを交換して、ポップコーンを作る装置の工作や火起こし体験など、普段のスカウト活動のようなものを体験できるプログラムも展開されていた。

インターナショナルデイ

インターナショナルデイ概要

7月30日はインターナショナルデイとして各国の文化に触れることのできる日だった。14時から17時にインターナショナルカーニバルがドラゴンで行われ、日本派遣団は縁日をコンセプトとして日本のお祭りの雰囲気を再現した。当初、4つのブースを展開予定だったが、会場の様子や広さを当日に知ったため、手裏剣Ninja BINGOを諦めて、ヨーヨーブース、フォトブース、割箸鉄砲ブースの3つで展開した。

ヨーヨー

当日の午前中で5名程度が風船を膨らまし続けた。近くに水道がなく、鍋で水を運んだ。ヨーヨーの見栄えが外国人に好評で、行列が常にできていた。 ヨーヨーすくいを知らない外国のスカウトが多かったので、ブースを出店して日本の新たな一面を披露できた。

フォトブース

浴衣や甚平といった日本の伝統衣装、また綿菓子や風車の小道具を身に付けることで日本文化を体験してもらった。また、*SNS*サイト*Instagram*のフォトフレームの枠のなかで写真撮影を行い、写真を投稿することで、現代文化との融合も果たした。

手裏剣-*Ninja BINGO*

忍者になりきり、折り紙で作った手裏剣を9マスに向かって投げ、ビンゴを目指すといったゲームだ。しかし、十分に行えるスペースを確保できなかったため、中止となった。事前に用意していた折り紙の手裏剣は記念品として配ることで日本の文化に触れてもらうことができた。

スカウトショップ

後半の会場にはスカウトショップが開店されており、スカウトグッズや大会記念グッズ、アウトドア用品等が販売された。営業時間は10時から19時となっており、ほぼ終日大盛況で入場制限が行われていた。

キオスク

後半の会場にはお菓子やジュース、アイス、ホットドッグ等が販売されていた。キオスク内には充電スポットもあり人が絶えずおり、憩いの場ともなっていた。

その他売店

アイスランドやスイスがカフェを出店しており、それぞれの国の料理や飲み物を振る舞っていた。後半期間の食材はムートマーケットと呼ばれるお店でトライブごとに必要となる食材等を揃えていた。

クラブ

後半期間に毎日夜1時まで開店されており、様々な国のスカウトといっしょに盛り上がっていた。第15回世界スカウトムートにおいてアルコールは禁止されていたため、ノンアルコールの飲み物が販売されていた。

Chess World Record

各国から代表者1人が出場し、全員と同時に対局をするアイスランドのチェスチャンピオンとチェスの勝負をするという内容だった。1度に対局した最も多い人数というギネスに挑戦するもののようだったが、挑戦者の数はそこまで多くなかった。
私は今までチェスの経験が無かったため、対局の5日ほど前からスウェーデンのスカウトにチェスを一から教えてもらい、出場した。夜遅くまでの練習や朝練などを行ったが、2時間粘った結果負けてしまった。
このプログラムによって、得た経験や出会いは私にとって大切な宝物になった。

充電

前半は各エクスペディションセンターで充電スペースが設置されていた。セルフォスでは、緑色の木製小屋の中に充電スペースが設けられていた。後半はアリーナの近くにあるキヨスクに併設されていて、そこで充電をすることができた。

治安

非常に良好でこれといった注意喚起はなされなかった。大会中未確認ながら盗難が発生したとの噂があったがムートに参加した各国からの参加者の水準も高く世界ジャンボリーのような治安の乱れは感じなかった。

情報のIT化

班ごとにプログラムを選択するため、事前に班員同士で連絡をとる必要があり、そのための連絡手段としてFacebookの利用が公式的に認められていた。また大会期間中の情報共有は、「Moot2017」という公式アプリを利用し、新しい情報が随時更新されており、指導者やISTからの直接的連絡はほとんどなかった。そのためスマートフォンまたは代わりとなる電子機器が必需品で、開会式前にはSimカードの配布、後半の会場にはWi-Fiがあり、充電場所の安全面も確保されていた。（Simカード、Wi-Fiの利用は有料）

個人感想

埼玉県連盟川口第１団
四至本鈴香

「暮らしていた。」
　私にとっての第15回世界スカウトムートは「暮らしていた」という一言に尽きる。私は世界ジャンボリーといったWOSM規模の活動に参加したことがなかったため、今回の第15回世界スカウトムートが初めて世界を体験する機会であった。SNS上でしか関わっていなかった異文化で育った同年代の仲間と、母国語ではない言語を話しながら共に野営する。スカウト活動を続けていても、日本ではこの先体験できないであろうものであった。
　実際に会って共に過ごしてみると、同じスカウトであることには変わりなかった。スカウトそれぞれの性格が違うだけでなく、国や宗教、慣習の違いに最初は戸惑いもあったが、お互いに知ろうとし、お互いにわかろうとし、知らないことを知っていくことへの楽しさを覚えていった。そして、約１０日間という期間の中で次第にこの状況や環境に特別感というものを抱かなくなった。
　「まったく違和感がない。そうだ、自分はここで生活している。暮らしているんだ。」知らなかったことを知ること、自分とは全く違う人がいること。同じ食べ物をおいしいという人と、まずいという人もいる。ただこの場に共通しているのはスカウトであることで、そんな彼らと過ごしていると、日常でもちかいやおきてに共通する言動が無数にあった。私たちはプログラム選択や時間の使い方が自由であったあの場で、のびのびと過ごしていた。「ローバーだからこそできること。」が自然と溢れていたように思う。
　ここで私は今回の参加目的を半分だが、達成できたと思う。「世界のローバリングを見つめ、自分のローバリングを見つける」が今回の志望動機であった。『ローバリング』の本当の意味で理解できたと思う。「自由であることとは、たくさんある選択肢のなかで自分興味あるもの、やりたいものを見つけ出し、自分の足で向かっていけ。するもしないも自分次第だ。」大会目標は“Change”とあったが、帰国してからのスカウト活動への意識が確実に変わった。自分は“Change”できたと思う。
　私の中でムートはまだ終っていない。終わることができない。目指すべきものは見つけたが、まだ何をしたいかはわからない。
　“Paddle on your canoe.”「自分のオールは自分で漕げ」
　限られた残り時間の中で、精一杯取り組んでいきたい。

埼玉県連盟久喜第1団
木村祐介

今回の海外派遣が私にとって初めての海外派遣であった。本大会期間中は国際班を編成され、私の中で班とは四六時中共に過ごすものであると思っていた。しかし、そんなことはなく時折々でしか活動することはなかった。同じ時間を過ごしたのは食事当番のときとプログラムのときだけであった。また、プログラムも参加しない旨を伝えればサイトにいることも可能であり、個人の意思で活動できる大会であった。

言語についても、他国からの参加者は英語が堪能であると思っていたが、あまり得意でない者もおり、他の者に通訳をしてもらっている場面が見られ私自身安心した。アナウンスなどわからないときは回りの者に聞けば容易に必要な所だけを教えてくれるので、特に言語について困ることはなかった。

他国の参加者から一番見習い点は、待ち時間などの使い方である。彼らは時間があれば回りを巻き込んで歌を歌ったり、スポーツをしたり、ゲームをしていた。これは日本のボーイスカウトでは見られない光景であり今後取り入れたいと感じた。

今回、国際班として数多くの人と自国の軍事、徴兵制について話すことができた。特にオーストリアで難民問題について話せたのは良い経験であった。

今回の派遣で、日本の活動と海外の活動の違いついて知ることができた。この経験で得た他国のスカウティングの良い点を日本に広め、活動の質を高めて行きたい。

埼玉県連盟熊谷第2団
泉田駿

第15回世界スカウトムートに参加するまでは「日本」という国を「日本の中」から見てきた。狭い視点しか持てなかった自分でもあった。今回の世界スカウトムートではアイスランドの文化や自然を利用したプログラムや外国の参加者との交流を通して、日本だけではなく様々な国の技能や考え方なども吸収していき今までの見方を変えたいと思い参加した。第15回世界スカウトムートでは様々な国のスカウトが混成して構成された班で開催期間中を過ごすことになった。班が4つ集まったトライブについたリーダーから出される指示も全て英語。初日に軽い捻挫を起こしてしまい、救急所で症状を説明するにも苦労するなど、今まで英語ばかりの環境に身を置いたことのなかった自分にとってはコミュニケーションをとること自体が難しかった。幸いにも班やいくつかのトライブが集まって構成されるエクスペディジョンセンターにも日本人がいたため大きな助けとなった。しかし長い時間を過ごすトライブの人たちとコミュニケーションをとらなければ孤立していくことは見えていた。話しかける前からある程度シミュレーションをしたり、手などの動作を加えて伝えることで少しずつではあるがコミュニケーションがとれてきた。またなかなかコミュニケーションがとれない自分にも周りのスカウトは接してくれて嬉しかった。言語の壁というのは高いものがあるが、言葉が伝わりづらい状況でもコミュニケーションをとることができることを学べたし、何よりも日本語ではない言語でコミュニケーションをとれたことに嬉しさを覚えた。ただ、言語を知っていればもっと深くコミュニケーションをとれたってことを考えるとしっかりと学んでおくべきだったと後悔している。様々なプログラムを通してアイスランドの自然を肌で感じたり、文化について学んだりした。広大なアイスランドの自然は時には脅威になることがある反面、大量の水が流れ落ちる滝や何十年もかけて作られた洞窟など自然はすごい力を持っており、それらを通してたくさんのことを学ぶことができた。また、時間の流れも海外ならではだと感じた。大会前半のプログラムは班ごとでの行動であったが、大会後半のプログラムは各自の選択であった。多くのプログラムに参加するスカウトもいればそうでないスカウトもいた。それぞれのスカウトが自分なりの時間を過ごしていた。プログラム以外でも起床や就寝時間は決められていない。時間の使い方は各自の責任であったように思えた。日本の中だけではできないような経験をすることができ、様々な観点から自分自身の知見を広げることができた。今回の第15回世界スカウトムートに参加して、今までのスカウト生活の中で得てきた様々なことを駆使してきた。普段の活動があるからこそ、大会期間中を快適に過ごし、様々なことを感じ学んだりできたと思える。このような素晴らしい経験をさせていただくためにサポートしてくださった家族、団の方、周りの方に感謝し、この大会で得たことを様々なところで発信するとともに、ムートで得た経験を活かして自分自身をより良い方向に”Change”していき、今後のスカウティングを行っていきたい。

埼玉県連盟草加第3団
草間明浩

世界スカウトムートは起床、就寝時間、炊事内容など殆ど大会運営側から指示されることが無く参加者に多くのことが委ねられていて活動しやすい国際大会だった。空いた時間をどのように使うか参加者各自に任され、各々自由に活動を行うことが出来た。高緯度であるアイスランドはなかなか日が沈まないので夜遅くまで活動することが出来たのも大きかった。
大会期間中は各国の参加者と共に班を構成して生活、活動したが自分が所属したSelfoss09は面白いメンバーが集まりとても賑やかで楽しい時間を過ごすことが出来た。積極的にコミュニケーションをとり輪の中心にいるイギリス人、同年代とは思えないほどの貫禄と格好良さを持ったメキシコ人など尊敬すべき点や憧れるものを持っているメンバーと共に過ごすことが出来たことは非常に貴重な経験となった。しかし折角の世界スカウトムートで国際班を編成していたのに同じサイトの日本人同士がつるみすぎてしまったことが反省点として挙げられる。新たに出会った仲間だけでなく今までの国際活動で出会ってきた香港、台湾、シンガポールの友人達とアイスランドで再会できたのは嬉しい出来事だった。これからも彼ら彼女らとの交流を継続していきたい。
静かで存在感が薄いからかサイレントニンジャという名前をいつの間にか付けられていた。大会期間中日本人からもこの名で呼ばれ、名前の響きが格好良く自分もこの名が気に入ってしまった。
アイスランドの大自然は素晴らしく毎日が感動的であった。開催地が国立公園内だったので日本の地元では絶対に見ることが出来ない地平線、澄み切った青空、幻想的な夕日と朝焼けは深く自分の心に焼き付いた。またアイスランドの水の美味しさは何にも代え難いアイスランドの醍醐味であった。水道水がミネラルウォーター並みの透明感と風味であることは感動するとともに日本の環境汚染に絶望したものだった。
健康面では一日の寒暖差や疲れがたまり体調を崩してしまい活動に参加出来ない日があった。野菜の摂取と水分補給が不十分だったことも原因の一つとなってしまい、野営生活における健康管理の基本が守れていなかったことは大きな反省となった。
今回初の試みとして交換品の露店を人生で初めて開いた。今までのジャンボリーでも多くの交換品を持ち込んで交換をしていたが自分の交渉力不足であまり交換が成功しなかった。そこで今回、交換品の多さを活かし露店を開いてみた。多くの交換品を「捌く」のに効率的であり、自分が持参したワッペンなどに対してどのような反応を示してくれるか見たかったのだが訪れる人とのコミュニケーションが楽しかった。
今回の大会テーマはChangeだった。この大会を通じて自分がどのように変わることが出来たはまだ自分では分からない、しかし世界の仲間との経験、大自然に感動したことは自分の人生にとって必ず役立つことになると確信している。このような素晴らしい大会に参加する機会を提供してくれた家族、団、地区、県連盟、日本連盟にはとても感謝している。

東京連盟中野8団
沼上志帆

今までに何回か海外派遣には行った事はあるけれど、それは全て派遣期間は日本人で一緒に過ごす派遣でしたが、今回は一人だけで自分のトライブに行くという事で行く前からすごく不安でした。幸い同じエクスペディションセンターには日本人が多く言葉が通じる相手が多かったのでとても助かりましたが、班のメンバーはイギリス、オーストラリア、ポルトガル、メキシコ、ブラジル人とみんな英語が堪能でトライブにも班にも日本語ができる相手はいなく、すごいスピードで話すのでなかなかなじめなかったけれど班の人たちは英語が苦手な私にもすごく優しくたくさん話しかけてくれて、プログラムに出かけていくうちにだんだんと仲良くなり、カタコトながら話せるようになっていきました。やはり言葉が通じなくても伝えたいという気持ちと理解したいという気持ちでコミュニケーションは成り立つという事と日本語人口の少なさを実感しました。

プログラムはアイスランドの自然を満喫する事が多く、東京にいたら見ることのないきれいな景色にたくさん出会えました。やはり雑談に混ざるほどの英語力はないので自分の楽しめる楽しみ方をしようと思い、いつも派遣に行くときに集めているネッカチーフの交換をたくさんしたので今回もたくさん交換することができました。後半の全員が一つの会場に集まって、交流やプログラムに参加しているけれど自分の自由な時間を過ごしているような特別な時間の過ごし方はとても不思議な空間でジャンボリーとは違ったローバーならではの雰囲気を感じました。派遣期間ずっといろいろな国の人と過ごすことはとても初めての体験でとても貴重な経験ができてよかったです。

また、バングラデシュで出会った台湾の友達にお互いの旅行を含め、3回目の再開ができ、とてもうれしかったです。そしてその子に英語上達したねと言われてとても嬉しかったです。今回の派遣でもたくさんの友達を作ることができ、また行きたい国、会いに行きたい人が増えました。

今回の派遣で得た経験を今後のスカウティングに活かしていきたいと思います。他にも英語を話せるようになりたいという気持ちがより強くなったのとほかの言語にも興味を持ったので努力していきたいと思っています。

東京連盟世田谷10団
枝迫雄大

世界スカウトムートへの参加を希望した当時、僕はまだベンチャースカウトで高校3年生の冬。ローバーのロの字も、ムートのムの字も分からない僕だったが、大会の広告として発信されていたアイスランドの動画を見た時、「ああ、僕もついに『呼ばれた』な」と、すぐに申し込んだ。というのも僕は中学生の時からお笑い芸人でアイスランド総合研究所名誉教授のふかわりょうさんのラジオを聴いていて、その中でふかわさんが言っていた「アイスランドは『呼ばれて』いく国」だという言葉を覚えていたからだ。この夏の、一生忘れないであろう経験と自身の成長、変化、世界中の素晴らしい友人達を手にした今、思えばこんな、一見くだらない理由でムートに興味を持った自分に感謝している。

これまで報告書のページをペラペラとめくるだけでも、この大会が非常に楽しく、充実したものだったことはご理解いただけたと思う。だから僕はこの感想パートで、その「楽しさ・充実感」についてさらに深く掘り下げて伝えられればいいなと考えている。長くなるが、2つのキーワードに絞ってここに述べる。

1つ目に、ムートを表す上では欠かせないキーワード「多様性」について述べたい。多様性とは「色々いる」ということで、日本でも近年、個人に焦点を当てる価値観が大切にされるようになり、よく使われるようになった言葉だ。その「多様性」を最高レベルで再現したのがこの大会だった。
僕は今までに、世界ジャンボリーを含む複数の国際スカウト交流を行ってきたが、世界スカウトムートはその点、一味も二味も違う、特殊な大会だと感じた。

大きな特徴は、参加者が18歳以上25歳以下の「青年スカウト」であること。19年という長い歳月を、全く異なる環境で、全く異なる体験をもって育った世界のブラザーとシスターたちは、何から何まで僕と違う。同じ時代を生きた、という共通点はありながらも、その一人ひとりとの出会いが僕にとって新しく、個性的なものに感じた。

さらに、その出会いは「同じサイトで寝食を共にする」という、これまた特殊な形式を通して深まり、今は友情となって僕らをつないでいる。100の国と地域から集まった人と、同じ釜の飯を食い、朝まで踊り、語り明かした。これも、青年スカウトだからこそ成立する最高の体験で、忘れられない思い出でいっぱいだ。
エピソードをつらつらと書き始めてしまえば、大変な量になってしまう。体温調節機能がぶっ飛んでいて、いつも上裸のオーストラリアスカウト、ミッチェルの話、ロストバゲージで大会期間中の半分を手ぶらで過ごしたスカウトの創意工夫の話、僕がブラジルスカウトの公式集合写真に「カルロスせいや」として紛れ込んでいる話などなど、本当は書き連ねたい話がたくさんあるが、いつかエッセイでも書くときにとっておこうと思う。
毎日が「そんなのアリ？！」の連続で、「それアリだね！！」の連続だった。
人間、「こうじゃなきゃダメ」なんてことは全くないんだな、と改めて思った。
平和な世界がどんなものかは分からないが、違いを敬い合いって同じ人間、スカウトであることを誇りに思える、この多様性あふれる世界スカウトムートは間違いなく平和な空間だったと僕は思う。

2つ目に、話題に上げたいキーワードは「コミュニケーション」だ。ムートでは常に複数の選択肢が用意されていて、何をするにも、誰かと話し合い、意見を交わし、自分たちなりの方法で選ぶ道を決定して行く必要があった。国籍や性別、食生活や宗教、価値観までバラバラのメンバーとの生活だったが、自然とコミュニケーションが取られる、この大会の特有の自由度が、そういったハードルを超えて、僕らの仲を深め、より楽しく、充実した大会をる繰り上げていたと感じる。

WOSM規模の大会では、英語、フランス語が公用語として定められ、日常的には英語が使われる。しかし、ほとんどの参加者が英語を母語としていないため、国ごとに特徴的な訛りがあったのは印象に残っている。お互いに相手の言いたいことを汲み取ろうと精一杯になるため、英語が聞けずとも理解できたり、喋れずとも伝えられたりすることが多くあった。

日本人であることが会話のきっかけになることは少なくなかった。アニメ文化や、2年前に山口県で行われた第23回世界ジャンボリーの影響で、日本に興味を持っている参加者はとても多く、日本人であるという事実だけで場を盛り上げられるほどに僕らは人気だった。キャンプファイアーの中心に躍り出れば「JAPAN!!!」と悲鳴が上がるほどだった。

驚いたのは、参加者の中に自国で日本語を勉強しているというスカウトがちらほらいたことだ。日本の学校でいう第二外国語の立ち位置に日本語があるそうで、「こんにちは！」「ありがとう」と、よく声をかけられた。外国の地で、外国スカウトが僕らの国の言葉を、その意味を理解したうえで使ってくれたことからは、前向きな歩み寄りを感じ、英語で同じことを言われるより心に響いたように思う。そんな経験から、僕は今回のムートでできた友人と、彼らの母国語で会話をしたい、という気持ちが芽生え、帰国後、大学でスペイン語や中国語などの第2外国語の勉強を少しずつ始めた。いつか、友人たちと再会したときには、その言葉で、僕が英語で伝えきれなかった様々な気持ちを伝えたいと思っている。

今、改めて、僕はアイスランドに、そしてスカウトムートに呼ばれたのだと、実感している。ムートを通して、自分だけの、特別な価値観を手に入れた。また人生を通して目指す場所はより明確になった。まずはこの、始まったばかりのローバーウェイを、全力で駆け上りたいと思う。

ローバースカウトには実際にムートへ参加してもらい、仲間と語り合いながら自分たちの活動をさらに飛躍させてほしい。その達成には日本国内でのローバースカウトムート開催が大きな助けになる。

また、2021年にアイルランドで開催される第16回世界スカウトムートには、日本連盟から今回の参加人数17人を超えるスカウトに参加してもらいたい。

これらは、日本のローバーリング、ひいては日本のボーイスカウト活動全体をより活発するきっかけになるだろう。

東京連盟世田谷第10団
枝迫七海

派遣前からアイスランド到着後まで、いろいろな問題が起こり、解決の糸口が見つからないとても不快な日々が続いていた。そのため、わたしは、この派遣に申し込んだことをずっと後悔していた。世界スカウトユースフォーラムのオブザーバーたちと先に入国して、アイスランドローバームート参加者を待っていたのだが、今後の展開を考えると気が重く、他の日本人派遣員と会っても気が晴れることはなかった。しかし、事前に連絡を取り合っていた、海外スカウトの班員たちに会った時から、気持ちを切り換えることができた。両親が姉弟揃ってこの派遣に参加させてくれていること、団や地区からもサポートをいただいていること、大学の学期末考査を受けないという選択をしてまで来ていること、第23回世界スカウトジャンボリーでプロモーションビデオを見た時の初心を思い出して、後悔の無い活動をしようと決心がついた。

この派遣では、英語力よりもコミュニケーション力の方が重要であることを実感した。私は英語を得意としないし、同じ班には英語が全くわからないスカウトもいたが、トライブ（隊）や班のみんなとすぐに仲良くなることができた。今まで自分にコミュニケーション力があるとは思っていなかったが、伝えるためにできることをしよう、という気持ちが強いということがわかった。大学で第二言語習得論を学んでいるので、コミュニケーションを取る為に必要なのが語学力だけではないということが実践の場で分かって良かった。

地平線が見え、木が全く生えていない、広大な自然の中でのキャンプは、風も強く、雨も凌ぐことが出来ない。そして22時間太陽が出ていてずっと明るい野外での生活は、日本ではけっして体験できないものだった。喧騒なアジアばかり訪れてきた私にとっては、建物がなく家の高さも低いところはとても開放的な気分にしてくれた。

私が現地で体験したアイスランドらしいアクティビティは急角度のごつごつした山Ingolfsfjallを登ったり、Thingvellir国立公園内の熔岩洞窟に行ったり、アイスランドモス（苔）の上でのお昼寝などだ。心残りとしては、もう少し「アイスランドの自然」を体験したかったことである。季節が違えばオーロラを見る事ができたかもしれない、アイスランドの鳥パフィンに会う、自然の中の温泉でゆったりする、といった体験もしたかった。

多くの海外スカウト達と友達になり、それぞれの国でのスカウト活動の話しを聞いたり、歌やゲームを教えてもらったり、たくさんの収穫を得たこの派遣に参加できて良かった。始まりは最悪だったが、大会期間中は心から楽しむことができた。

私たちローバースカウトがつつがなくプログラムを終えることができたのも、期間中、陰で支えてくださったIST（International Service Team）の大きな力があったからだと思う。

そして、サポートしてくださった全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

愛知県連盟名古屋87団
池田彰浩

日本人は英語が苦手だと言われており、私自身もコミュニケーションに自信がなかった。外国人というのは誰でも英語を話しコミュニケーション能力の高い人々だと思っていた。しかし、ムートに参加すると外国人が全員英語を使いこなせているわけではないことに気がつく。イギリス、オーストラリアのイングリッシュスピーキングピープルにはビビってしまうが、ほとんどの国が第二言語として英語を話している。第二言語を話す人々の言葉はわかりやすいが、イギリス人が今後のスケジュールをサマリーしたときの理解できなさは異常だった。要点をまとめてくれているはずなのに言葉が頭に入ってこない。この言葉の壁に囲まれて苦労した経験から気がついたことがある。日本語でも同じ現象が起こっているかもしれない。しっかり伝えようと要点を説明しても、結局どうしたらいいのかわからないことが少なくない。人に何かを伝える時は、『いつ』『だれ』『なに』『どうする』という疑問詞を意識して伝え、図で伝えるとさらに効果的らしい。実は班に英語が全く話せないアルゼンチン人がいた。彼は自分よりも確実に状況を把握していなかった。集合時間にいない。みんなで遊びに行く時にいない。食事を担当している時に寝ている。これらは彼の国民性と言うよりも状況を把握できていないがために、彼をそのような状況に追いやってしまったことが原因だと思う。一緒の班で過ごすうちに段々とノンバーバルコミュニケーションで意思疎通を行い、一緒にいるべき時に一緒にいられるようになった。自分は集団行動についていくのがやっとだった。英語を不自由なく使いこなす人たちも自分のことで精一杯だった。しかし、それを言い訳にして人に気を配らないことがあってはならない。もし、もっと早くからアルゼンチン人に伝えることを意識していたら、チームがもっと仲良くなれたかもしれない。黙っていれば済んでしまうことも、自分の一言で状況が良くなることがあることを学んだ。自分の行動で状況が良くなることがあることを学んだ。自分のことで精一杯になるだけでなく、仲間のことでも精一杯になれる人になりたいと強く感じることのできる海外派遣だった。

兵庫連盟神戸43団
小林千乃

私たちの班、VEST08-3班は英、香港、伯、各2名、加、豪、日、アイスランド計10名で構成されており、公用語は英語。私の行ったVestmannaeyjar（ベストマン島）は日本人一人であり、初めは不安で正直なんで私だけ？と悲観的に思っていた。だが２日目にはせっかく来たのだからムートの醍醐味である多国籍スカウトとの長期英語キャンプを楽しもうと前向きに捉えられるようになり、それは私の中での小さなChangeだったと今思う。キャンプ生活では戸惑い、時に日本派遣団シックになったりしながらも、班のためにできることを考え自分なりに行動し、最後には寂しくて泣いてしまったほど班やトライブでの時間を充実させることができた。これは今後において一つ、自分の中で乗り越えた、成し遂げたという自信になるものではないかと思う。

生活の中でもネイティブの英語を使う人を見ていると言語による意思疎通ができるということはやはり全てにおいて重要だなと痛感し、もっと英語を勉強して使いこなせるようにしたいと思った。その一方で、私たちスカウト同士であれば、簡単な歌やロープ結びなどの技能、ちかいやおきてについての考え方といった「スカウト精神」、各国共通にあるものが言語に取って代わるコミュニケーションツールになるということを日々の生活において実感した。それに気付いた時、改めて自分がスカウトであることに誇りを覚え、またスカウト活動って本当に素敵だなと強く感じ、将来は自分たちの後輩にもこう思ってもらえるような活動に携わり、参加させてもらえた分の恩返しをしようと思った。

今回、国は違えど言語が同じというだけで似たような文化を持つ人々がいることに気づいたり、街のそばに噴火後の陥没した火山があったり、体を傾けないと飛ばされるほどの強風が吹き荒れたり…。今までの活動では知る由もない新たな発見ができ、またアイスランドの壮大な大自然の中に身を投じ、「自然」の力強さとこの自然によって私たちは生かされているんだという当たり前のことを初めてこれほどにも実感することができた。

今回の“Change”何を変えられたか。今ははっきりと分からないが、ムート派遣を通し、今後のスカウティングにおいての自分のオールの漕ぎ方のヒントになるようなものを掴めた気がする。そしてそのヒントを元に、これからの自分の活動をより周りに還元できるような活動に変えていきたいと思った。

この度の派遣費用や活動を理解、賛同してくれた親、そして支えてくださったリーダー方、本当にありがとうございました。これからはこの経験を生かし、後輩に還元出来るように自分のできることは何かよく考え今後のスカウト活動を展開していきます。

兵庫連盟姫路16団
神生柚貴

今回世界ローバームートに参加しようと思った理由は、アイスランドに行って見たかったからという単純なものであった。もちろんただ行きたいだけならば旅行で行けばいいだけの話だが、アイスランドは自然の宝庫である。特に地殻活動による岩がむき出しになった大地はまるでどこか違う星のようであり、映画のロケにもしょっちゅう使われていると聞く。それほどの大自然、ただ行って帰ってくるだけではもったいない、是非キャンプ生活を通じて余すことなく堪能して来たいと思った。事前情報が徐々に公開されていくにつれ、インターナショナルチームなるものがあることがわかった。初対面の海外のスカウト達といきなり班を組んでキャンプ生活など本当に自分に出来るのだろうかと心配になったが 、実際には杞憂であった。私の班はアゼルバイジャン、ヨルダン、メキシコ、イギリス、フランス、スイス、オーストラリア、アルゼンチンのスカウト達がチームメイトだったが、初対面でキャンプ生活をするのは全員同じであり、すぐに仲良くなることができた。私はその後アゼルバイジャンで開催されるWSYFとWSCに参加する予定があったので、アゼルバイジャンのフセインと特に仲が良くなり、大抵彼と行動していた。朝起きてから朝食、午前の活動、昼食、午後の活動、夕食、そして夜と一日中海外の人と過ごすのは新鮮であった。カルチャーショックはあまり受けず、むしろ、ああ彼彼女たちも結局は同じ人間だなあと思うことのほうが多かった。
コミュニケーションに困ることは全く無かった。自分もそうだが相手も必死で相手の言うことに耳を傾ける、聞こうとしてくれるという意思が伝わってくるので非常に話しやすかった。最後にこのような素晴らしい派遣に参加する機会を与えてくださったすべての人に感謝します

和歌山連盟橋本第2団
吉岡聖

私にとって今回のムートの中では初めての経験　が多かったものの、特に多国籍スカウトとの共同生活が記憶に残っている。初対面で国をまたいだスカウトが10日弱共同生活することへの不安が大きかったが、海外のスカウト達は私たちよりも成熟しているように感じた。自分からリーダーシップを取ろうとする姿勢を持ち合わせており、頼もしかった。

自分も彼らのように自発性を持って振るまわねばという意識が自然と湧き上がってくるムートであった。参加しているスカウトの国籍や育った環境は違えど、それぞれが持つスカウトスピリッツは同じものであるのだなと感じた。スカウティングという共通事項があれば、協調性を持って共同生活が出来ることを身をもって体感できた。

最後に参加において関係してくださった方々に感謝の意を表したい。

和歌山連盟橋本第2団
武藤恵祐

僕が配属された遠征地であるアカラネスのサイトに日本人は僕を含めて３人いましたが、隊が違い、日本語が全く聞こえない40人の中で生活を送りました。班のメンバーの国籍はイギリスが2名・スイス（ジャーマンスウィッシュ）が2名・イタリア・メキシコ・韓国だったので母国語が英語でない人が多く、あまり英語を喋れない者同士、より仲良くなることができました。アカラネスは首都レイキャビクから北へ車で45分ほどの場所にある小さな港町で、キャンプサイトは幹線道路から町へ入る入り口付近に置かれました。目の前が海で風が強く、洗濯物を干して目を放すと10メートルほど先へ飛ばされていたこともありました。

プログラムは上記のような、海が近いアカラネスを満喫するものが多く、地元の方々のガイド・支援のもと実施されたプログラムもいくつかありました。特に印象に残ったのはキャンプファイヤーと地元の方との交流会（食事会）で、キャンプファイヤーは夜の21時から行われ、司会進行者なし、終了予定時刻がなく、ISTがエンドレスで木をくべ続け、次々と各国のスタンツを入れ替わり立ち替わり披露して盛り上がるという経験したことのない形態でした。日本からの3人も2回スタンツを披露し、大いに場を盛り上げることができ、とにかく楽しかったです。そして地元の方との交流会はメイン会場に移動する前夜、すなわちアカラネス最後の夜に行われ、海辺の広場で地元の方がハンバーガーを作って振舞ってくれるというものでした。改めてアカラネスを愛しく思う気持ちを募らせてくれる良いイベントでした。他の遠征地をすべて目にしたわけではないですし、比較するのはおかしな話ですが、アカラネスは最高でした。皆がフレンドリーで思いやりの心にあふれ、とても快適に過ごすことができました。特にそのことを実感したのはメイン会場に移動してからでしたが、思い返すとなぜその時にそう感じたのか、真相は謎です。きっと間違いなく言えることは環境に恵まれたということでしょう。

今回はアイスランドという日常生活では考えられないような場所にこのような形で行くことができ、人生において二度とないような貴重な経験をたくさんしてきました。「スカウトであること」の誇らしさを改めて認識、実感しましたし、スカウトという国際社会の一員であることのすばらしさに気づくことができました。国籍も言語も文化も違うのに、皆共通のスカウト精神を忘れずに持ち、胸を張ってスカウト活動を行っていることほど魅力的ですごいことが他にあるでしょうか。今後、この派遣を経験した一人として責任と誇りを持って、さらに充実したスカウティングを行っていきたいと思います。

大阪連盟堺第15団
戸谷明寛

今まで海外派遣に何度か参加してきたが、いつも沢山の日本人に囲まれて過ごしていた。しかし、今回は生活の中心とはる班に、日本人は私1人だけだった。始めは少し孤独感を感じていたが、皆とても気さくで積極的に話しかけて来てくれる子もいて、不安が徐々に消えていった。日本人であることが功を奏したように思う。日本に生まれて良かったー。
今までNJやWSJに参加してきたが、本ムートはそれらとは比べものにならないくらい活動範囲が広範囲におよんだ。WSJも23WSJにしか参加していないため、これが世界か！と思わされる内容だった。大会が前半と後半に大きく分かれており、散り散りになっていた参加者が集まるなんて、とてもワクワクした。それに、後半が始まったときはずっと会えていなかった人たちにも会えて、心がホッとした。
　今回のムートのテーマはChange！私は1つ大きなChangeを得て帰ってきた。コミュニケーションが取れるようになったとか友達が沢山出来るようになったとかいう内容ではない。前半の時に各国からChess大会に出場する人を出さなければならなくなった。私は今までChessをやったことがなかったので、すぐに断った。しかし、何か得て帰りたいと思い、初心者だったにも関わらず大会に出場することにした。幸い、皆が承諾してくれたので出場することがスムーズに決まった。そして、その時たまたま近くに居たスウェーデン人の女性にChess大会までの期間中Chessを教えてもらうことになった。Chessの練習は、始め紙で作ったChessボードと駒を使っていたが、後半の会場では既製品の貸出が行われていたため、使える日はそれを使ってChessの練習を行った。皆が夜遅くまでパーリーしている最中も朝早く皆がまだ寝ている最中も、彼女は私に付き合ってくれてChessの練習をひたすら行った。その結果、Chessチャンピオンとの対決は始めて1週間も経っていないにも関わらず、2時間持ちこたえることができた。
　チェスを出来るようになったことが私の一番のChangeだった。
　今回の派遣で私は自分にはまだまだ可能性があるということを感じた。これから様々な環境が変わっていく中を生きていくことになるが、常に自分がChangeし続け周りもChangeさせることができる人間になりたいと思う。

大阪連盟河内長野第5団
高見祐佳

私自身、海外派遣に参加するのも、班を組んで大規模な大会に参加するのも今回の第15回世界スカウトムートが初めてだった。そんな初めての海外派遣、多国籍班でのキャンプ生活には不安を感じていたが、それよりも高揚感を覚えていた。なぜなら、アイスランドは絶景の宝庫であり、この魅力溢れる国で世界スカウトムートが開催されることにわくわくしていたからだ。8日間の生活を共に過ごした班は、オーストラリア、チェコ、ポルトガル、スイス、ドイツ、ハンガリーの国の人々で構成されていた。班員の中で母国語が英語ではない人の多くは、英語を流暢に話せていて会話のスピードについていけなかった。そんな気が小さくなる私に対して、班員は「私たちはスカウトだよ。」という言葉で励ましてくれた。言語が異なってもスカウトであることには変わりないと再認識した瞬間でもあり、貴重な機会、たくさんコミュニケーションをとろうと前向きになれた。そして、私が気になっていた、スカウティングを続けているモチベーションは何であるかを聞き、文化の違いや、その人の価値観に触れることができた。

アイスランドでのキャンプ生活は五感を最大限に生かすことができるものであった。アイスランドの雄大な美しい景色や、耳にする聞き慣れない言語、伝統料理の味など、日本では味わえないものだ。このような環境の中、行わるプログラムはどれも新鮮だった。中でも、半日プログラムのハイキングでは、山からセルフォスの街を一望することができ、忘れられない景色となった。

海外派遣に参加し、ボーイスカウト運動は世界で繰り広げられている素晴らしいものであることを実感した。これから、下の世代や未経験者の人たちにもボーイスカウト運動の魅力の一つとして、この世界スカウトムートを発信していきたいと思う。

大阪連盟河内長野第5団
谷満梨奈

日本派遣団のみんなと別れて１番後ろ、Heimalandの席に座る。開会式が始まるのを待つ。会場の中なのにサイトまでバス出してくれるなんてリッチやな。重い荷物を運ばなくてラッキー。なんて考えていた。周りの人達が話しているのはそもそも英語なんやろか。後でみんなのとこ見に行ってみよ。とりあえずこの派遣のアプリを開いた。そこで初めて、会場内のそれぞれのサイトを遠征地と言ってるのではなく、アイスランドのあっちこっちに遠征地で生活することを理解。その瞬間から５日間日本人一人だけの生活が始まった。

引っ込み思案で内気で人見知り。今まで周りに助けてもらい、輪に入れてもらっていた。しかし、日本人一人の生活となった前半の５日間。日本人相手でさえ喋る方ではないのにましてや英語でなんてなど、考える暇はない。「今から何するの。」「何時に集合するの。」「どこに行くの。」「５日間ご飯を食べ損ねたら」と考えただけで生命の危機まで見え隠れする。それでも、分からない度に班のメンバーに話しかけ身振りや筆談まで使って、教えてもらう内に自然と輪の中に入っていた。思ったことを話してみる。意見を言ってみる。そしてこの経験を伝えていきたい。そんな風に思うようになり、行動に移して行くようになったのが、私が「change」したことだ。

ローバーに上がりたての夏、ISTとして参加した23WSJで揉め事の対処をし続けた。「それぞれの国の文化や考えの違いを理解していれば。」その反省も含め、帰ってから「海外派遣に行く」と紙に書いて壁に貼ったことが懐かしい。あれから２年、アイスランドでたくさんのことを体験し、さまざまな国のスカウトについて知ることができた。ローバースカウトながら、参加者として目線を経験できたことを大事にして、これからのスカウト活動にも活かしていきたい。

大阪連盟豊中第12団
坂田成実

これまでにも数回国際大会に参加してきたが、今回の第１５回世界スカウトムートはこれまでのどれとも違う、新たな経験を与えてくる大会だった。参加者の年齢が高い、言わば大人のジャンボリーに合わせたプログラム進行は、スカウトにほとんどの決定を任せた自由なものだった。そしてスカウトたちはその自由さを思いおもいに楽しんでいたのが印象的だった。私は非日常のプログラムに参加すると同時に、突如できた6000人の村に住んで、日常生活を送っているような感覚になった。それぐらい参加者の空気感が落ち着いていて、大会期間を心地よく過ごすことができた。今回の大会のテーマは「Change（変化）」であったが、私はそれを「人との対話」に見出した。日常生活のような毎日の中で暖かいココアを片手にさまざまな国からやってきたスカウトたちと何気無い話や、少し深い話をした。ケニアからきたスカウトは「アイスランドはなんて寒いの！ケニアの真冬の50倍寒い！」とニット帽と手袋をつけていて、その隣でアイスランドのスカウトは「今日はこの夏一番の暑さだよ。」と半袖で汗ばんでいた。今までの私なら、（世界には異なった文化や生活様式を持った人がいるんだ）と思っただろう。しかし、今回は違った。彼らと生活を共にすることで、（私たちはこんなにも違って見えるのに、こんなにも似ているんだ）と感じた。みんなお腹が空くし、夜には眠くなる。みんな「違うけど、同じ」ということに気がついた。この視点の変化は私にとって大きなChangeだった。

福岡県連盟北九州37団
中村　誠

今回の海外派遣は私にとって2度目の出来事であった。本派遣に参加しようと思った理由は、初めての海外派遣であった昨年の国際キャンプスタッフ計画派遣での体験が素晴らしいものであり、世界各国から同年代のスカウトが集まるローバームートでは、前回の派遣とは異なった体験ができるのではないかと思ったからである。

派遣前に開示された情報で様々な国のスカウトで班を構成し活動することがわかった。そのことに対して、英語での意思疎通ができるのか頭を抱えたり、大会に関する情報がなかなか得られないことに対して不安になったが、このようなことも海外派遣ならではの出来事と思い、割り切って楽しむことができた。いざ、大会が始まると、英語での会話についていけなかったが、23回世界スカウトジャンボリーに参加していた班員が数人おり、そのことをきっかけとしてコミュニケーションをとることができた。

プログラムに関しては、基本的には振り分けられた班で活動するものの、実際にプログラムに参加するかどうかは個々の裁量にゆだねられていた。したがって、プログラムに参加しないスカウトもおり、日本でのキャンポリーやジャンボリーを通してプログラムに参加することを当然のことと思っていた私には驚きであった。私の行ったプログラムの多くはハイキングであり、アイスランドのなだらかな山を登り、自然を満喫することができた。中でも、大自然の中で入った川の温泉は素晴らしい開放感を味わうことができ、格別であった。

本大会を通して、各国やまた各スカウトで価値観が異なるものの、一つのプログラムに共に取り組み、お互いの国での活動や他愛のないことについて話し合い、一緒に生活することのできるボーイスカウトにおける国際交流の素晴らしさを改めて感じることができた。これからは、この経験をベンチャー隊やボーイ隊で活動するスカウトに伝えていきたい。

モンベルジャケット

モンベルジャケットについて
今回の第15回世界スカウトムート派遣に対してモンベルさまから協賛品として
ジャケットを頂いた。

商品
商品名：フルネイパーカーMen's
素材：ゴアテックスファブリクス3レイヤー
平均重量：519g
カラー：今回はプライマリーブルー（PRBL）を選択。
サイズ：S、M、L
収納サイズ：φ13×21cm（持ち運び用ケース付属）
リンク：http://webshop.montbell.jp/goods/disp_fo.php?product_id=1102437

使用感
耐寒性が高く、また防寒性も高いためアイスランドでも十分に機能するもの
だった。ポケットが沢山あり、小物を収納するのに便利だった。また、サイズ感に余裕があり、着用していても行動の妨げにならなかった。デザインを海外のスカウトから褒められることもあり、デザイン面も優れていたといえる。

次回ムートにむけて

第15回世界スカウトムート、反省

・スケジュールが過密過ぎたため、参加スカウトの身体的負担が大きかった。時差があることを踏まえると、数日前に余裕を持って現地入りし、帰国時にも数日余裕を持って帰国として欲しかった。
・派遣団としてワッペンの作成を行わなかったため、他国参加者とスワップする時に残念がられることが多かった。
・現地を観光する時間がほしかった

第15回世界スカウトムート、次回への要望

・余裕を持ったスケジューリングをして欲しい。
・派遣団として共通のワッペンを作成したい。